



2011年10月

さくら

発行：偕行会透析医療事業部 さくら編集委員会

「透析療法と腎移植、膵腎移植－透析も移植も長くできるために－」

藤田保健衛生大学医学部 臓器移植再生医学講座 教授 杉谷 篤

偕行会グループの患者さん、スタッフを対象にして、腎不全患者に対する透析療法、腎移植、1型糖尿病患者に対する膵移植、膵腎同時移植に関する最近の知見と現状をまとめてみました。

1)透析療法と腎移植の現状

日本透析医学会が毎年まとめている「わが国の慢性透析療法の現況」によると、透析患者の総数は右肩上がりが増え、2010年末には29万7千人を越えました(図1上)。平均年齢も男性65.5歳、女性67.5歳と上昇し、60歳以上の透析患者は73.3%を占めています。透析導入の原因となった腎疾患をみると、2010年末患者の割合では慢性糸球体腎炎が36.2%、糖尿病性腎症が35.8%、高血圧から起こる腎硬化症が7.5%になっています。2005年導入患者の5年生存率は59.6%、2000年導入患者の10年生存率は36.7%でした。したがって、透析患者の増加割合は鈍化したが高齢化がすすみ特に糖尿病から腎不全を併発する人が多くなり、全身合併症も進んでいるので10年生存している人は約1/3とまとめることができるでしょう。



いっぽう、日本の腎移植は、2010年には年間1484例になりましたが、生体腎移植が1276例で、心停止あるいは脳死ドナーからの献腎移植は、この10年間、150-200例ぐらいで増えていません(図1下)。腎移植患者も高齢化がすすみ、2009年末では生体腎移植で平均43.3歳、献腎移植で平均49.9歳となっています。新しい免疫抑制剤の登場によって腎移植の成績もよくなりました。生体腎移植の5年、10年生存率(移植を受けてから生きている割合)はそれぞれ95.9%、91.9%で、5年、10年生着率(移植を受けてから腎臓が機能している割合)はそれぞれ90.7%、72.0%です。同様に、献腎移植の5年、10年生存率はそれぞれ89.1%、81.9%で、5年、10年生着率はそれぞれ77.8%、57.0%

図1 透析患者数と腎移植数の推移

